大塩事件追跡と全国調査

―全国各地の埋もれた史料発掘、その成果と今後の課題―

中 瀬 寿 一

Toshikazu Nakase

Ⅰ. はじめに ――大塩事件追跡の成果と今後の課題――

この約10年間、草の根、民衆史の立場に立つ財閥史研究を強く提唱し、ことに幕末の大塩事件(天保8=1837年)から明治維新、自由民権期に、ひとつの焦点をおいて内外にわたる史料の発掘・調査・収集の旅をたえずつづけてきたが、ようやくその成果が実りはじめ、『大阪産業大学論集(社会)』(() と略す) や『大阪産業大学学会報』(() と略す) のみに限定しても、次のとおり膨大な量に達し、周知のとおり、内外の学界のひろく注目するところとなってきた(この他『経営史学』『大塩研究』『科学と思想』『大阪春秋』その他に発表論文多数)。

- (1) 「大塩事件と特権門閥町人層の衝恵」 A No.53. 1980年刊。
- (2)「『浪華市鄽奇火災見聞之記』――旧鴻池表屋町人文化史料館とその史料紹介」®No16. 1983年刊。
- (3)「大塩事件をめぐる特権的門閥町人と庶民層の動向(上・下)」A №59. 1983年刊。
- (4) 『住友財閥形成史研究』大月書店 1984年刊。
- (5) 中瀬、村上義光、中瀬紀美子「大塩事件と打ちこわし続出下における *大塩ブーム。 ならびに *大塩狩り』の状況」 ③ №64. 1986年刊。
- (6) 中瀬・村上「京都と大塩事件(上)」A No.65. 1986年刊。
- (8) 中瀬・村上「同──京都と大塩事件(下)」A №68. 1987年刊。
- (9) 中瀬・村上・中瀬紀美子「史料が語る大塩事件の全国伝播と *大塩ブーム = 幕政批判 思想の胎動、民衆文化の創造——その1、畿内を中心に」 (A) No.72. 1988年刊。
- (III) 中瀬・村上「史料が語る大塩事件の全国伝播と *大塩ブーム = 幕政批判思想の波及、 民衆文化の創造——その 2 、江戸その他」 (A) No.73. 1989年刊。

こうした史料発掘と調査研究、執筆と発表、内外にわたる討論のなかで大塩事件・幕末維新史研究は、この10数年間にめざましい発展をとげてきたが、まだまだ全国的に埋もれた民衆史史料は多く、いまだに幕府側の機密史料の発掘は今後の大きな課題となっている。そうしたなかで、われわれの共同研究はこれまでの殻を破り、大塩事件をたんなる大坂の事件という狭い枠にとじこめず、国際的な視野に立って、大坂中心主義の史観を克服するとともに、現地第一次史料の発掘をスローガンに、全国行脚の旅をつづけつつ、"草の根》民衆史の観点から大塩事件像ないし幕末維新像の再構築に迫ってきた。そして堀鉄蔵の記録をはじめかなり数多くの埋もれた地域史史料をここに収録発表し、"われわれの共有財産》に高めることができたのは、大きな喜びとするところであり、ここには小説の素材が無限にころがっている、といっても決して過言ではない。

本稿では、以前発表した史料も若干ふくめ、最近新たに掘りおこした各地の史料をつけ加えて、大塩事件勃発(天保8年2月19日)直後の民衆動向をより具体的になまなましく、明らかにしてみたいと思うのである。ぜひご教示ご批判を乞う次第である(なお、数多くの史料については別稿(A) No.74. およびNo.76. その他でつづいて明らかにしたい)。

- II. 大塩事件勃発と道頓堀の芝居小屋の混乱、平野郷町の大坂城代への忠勤、鴻池本家の狼 狙ぶり、中斎の友人・間確斎の苦悶の書簡
- (1) 2月19日=中村仲蔵ら中の芝居で春狂言興業中、大塩事件勃発、宿所にとんで帰る——中村仲蔵『手前味噌』より——

天保 8 (1837) 年 2 月19日、大坂道頓堀の中の芝居において春狂言(「奴道成寺」「テレメンティ」「熊坂」など)興業のまっさい中に大塩事件が勃発し、観客も大騒ぎとなり、「第二段目の幕が今あきたるところなれど、この凶変を聞くと等しく直ぐに打出し、俳優も皆宿所にとんで帰」ったときの、なまなましい状況について、3 代目**中村仲蔵**の『**手前味噌』**(青蛙書房、1969年刊)が、次のようにビビッドに描いている――。

"時に天保八年二月、春狂言、中の芝居にて興行す。狂言は「奴道成寺」「テレメンティ」「熊坂」にて、一座の俳優は、中村富十郎(慶子)・同歌六・嵐かのふ・三桝源之助・中村芝翫(鶴助改め三代目)・小川吉太郎・中村玉助・同歌七・浅尾工左衛門等にて、初日より市中の評よく、かなり見物も来たり。大入とにはあらねど、初春のことゆゑ、景気も至極よかりしが、同月十九日朝五ツ時(注、AM.8)、俄に天満辺より出火の由にて見物も独立ちとなり、何となく物騒がしく、たゞの火事ではないぞと噂とりどりのうち、追々市中に焼け広がり、そのうち実証を聞くに、全く町奉行天満組の与力大塩平八郎・同格之助父子が徒党を結び、近在の百姓共を集め、其勢二百三十余人、豪商鴻の池が土蔵に石火矢、を打ち込み米銭を掠奪して貧民に施すと、その乱暴いふばかりなし。早くも御城代土井大炊頭殿も出馬ありて天満橋を切り落とさる。この時芝居は、第二段目の幕が今あきたるところなれど、この兇変を聞くと等しく直ぐに打出し、俳優も皆宿所にとんで帰り、妻子を助け、家財を運び、忽ち大坂の市中は修羅の街となり、浮説虚聞区々にて、人民安き心なし。"

(青蛙書房、1969年刊、P.160~161)

- ※なおこの点、長谷川伸三・小樽商科大学教授のご教示による。厚く感謝したい。

(2) 2月19日=攝津平野郷町町役人ら人足つれ、大坂古河藩邸へかけつけ、ただちに平野郷 にもどり、旅宿の手配、弁当作りに熱中 —— 攝津国平野郷町『覚書』より——

次に攝津国平野郷町総会所の年々の記録『覚書』にえがかれた大塩事件勃発当日の模様を紹介してみることにしよう。この「平野郷町は室町末期より堺とともに自治が行なわれた商人の町として知られ、7町4村より成る石高5,621石余の大きな在郷町で」、「朱印船貿易の末吉船の名で知られる末吉家を筆頭とする5人の惣年寄によって町政が行なわれていた。平野郷町は宝暦12(1762)年より東喜連村、西喜連村、堀村とともに、下総古河藩の土井氏の知行地となり、大塩事件当時は大坂城代土井大炊頭利位の所領であった」。大坂城までわずか約15㎞の近さで、大坂城代としても、古河藩にとっても重要な所領であった。それだけに事件勃発後、ただちに重兵征ら町役人が人足をつれて大坂の古河藩邸へかけつけ、その大変な状況を見聞、種々協議のうえすぐ平野郷町にとって返し、旅宿の手配や弁当作りに必死と

なっている(そして、それらを大坂へ届けた)状況が、次のようになまなましく記録されている――。

「大阪町御奉役様組与力大塩平八郎大坂市中所々放火致候一件

二月十九日

- 一、天満与力町ゟ出火之趣、用聞河内屋作兵衛ゟ申越候ニ付、重兵衛人足五人召連罷越
- 一、追々火勢強相成候様相見江候ニ付、平左衛門様・藤三郎様・寅蔵様夫々火役手入ヲ召連、付添佐兵衛・重蔵・人足三人召連罷越
- 一、御役所ゟ御地方御出役ニ付、人足弐人差出ス
- 一、町々村々も役々人足共半通り罷成候様被 仰渡候
- 一、九郎兵衛様・九兵衛様も御趣
- 一、九兵衛様御帰り被成候
- 一、**重兵衛・佐兵衛**被帰り、御家中・御家内様方当郷江御越ニ付、**旅宿用意**いたし候様申帰り候ニ付、**宿屋**井丁(町)々会所・寺々手当り申渡ス
- 一、前書之通、大変ニ而弁当等難出来ニ付、**弁当**遣之候様大坂ゟ申来候ニ付、**御衆中割子 五ツ、役人中竹ノ皮包にしめ付三ツ**、人足弐拾壱差遣し候事
- 一、佐兵衛引返し大坂行
- 一、藤左衛門様・久右衛門様・七郎兵衛様・勘四郎様・九兵衛様・生右衛門様・茂兵衛・ 市右衛門・重兵衛・俱吉郎□五江相詰、大坂表ゟ往来人調、光右衛門惣会所残
- 一、郷内門々厳敷メ切り、田畑□・樋尻□者添番付、メり致、泥堂□ハ垣外之者を以、取 堅め致ス
- 一、町々小前火之元念入候様申触、役々不絶見廻り為致、勘四郎様・九兵衛様・茂兵衛・ 重兵衛半棟丁ちん弐本、外二人足弐人召連、郷内見廻り有之

(中略)

(注) このあと、2月20日、22日、25日、28日および3月6日などの条でも、次のように書かれている——。

(廿 日)

- 一、出火者夜九ツ時頃鎮り候得共、徒党之方不相分候由 (廿二日)
- 一、前書御出足有之候御家中、大坂表又々騒動之由ニ而途中ゟ御帰り被成候
- 一、郷内門々メり和らき候由ニ付、大坂表之方大躰鎮り候迄、厳敷メり為致、泥堂□者垣 外弐人添番為致、役々毎夜廻り之儀、月番町始夫々申渡
- 一、**門真三番村軍次**入牢ニ付、表門メり置、牢守宅**か**出入為致、役人中時々見廻り致候様被 仰付候

(中略)

一、御役所ゟ御召ニ付、平左衛門様御出被成候処、**門真三番村百姓拾五六人御召捕**相成、 入牢之処、差掛、今晩ハ郷宿預ケニ相成候由被 仰渡候

- 一、門真三番村軍次在牢之処、大坂御番所へ御差出相成候
- 一、昨夜**門真三番村百姓**惣兵衛・惣八・久五郎・磯七・九郎兵衛・惣助・又右衛門・清八 ・佐兵衛・伊助・彦右衛門・惣七・庄三郎、**〆拾四人大坂の御連帰り入宇**被仰付候
- 一、今朝平左衛門様・九郎兵衛様・七郎兵衛様御役所へ御越、大坂詰人足日々手代り等ニ 而、人数相掛り混雑ニ付、当郷七町散郷ゟ三十人斗、併西成郡ゟ弐拾人、惣年寄中壱 人・地下役人壱人、丁々役々両人斗りツ、受持詰越ニ仕候段、被 仰上候処、御聞置 相成候ニ付、町々村々人数分ケ、月番町へ申渡ス、尤人足壱人百文ツ、御下ケ之筈
- 一、右中御屋敷へ差出候人足者四五日ツ、詰越之筈ニ而、困窮人之内、達者之者を出筈、 人割左之通

四人 野泥町 三人ツ、流町馬場町迄六町 弐人ツ、散郷四ヶ村 役々出勤ハ本郷ニ而両人、散郷ニ而壱人、七町之方ハ明日ゟ野堂町・流町出ル、余者 町順ニ両人ツ、罷出候筈

(廿五日)

一、門真三番村年寄九右衛門と申者御召捕相成、御調之上、垣外牢へ御入被成候 (中 略)

(日八日)

- 一、貝脇村友七御召捕相成、入牢被仰付候
- 一、三月六日当郷宿屋一同呼出、先達而ゟ大坂出火後、兎角頭取之者御手ニ不入、依之和・河両国等者取分厳敷御手当ハ有之、当郷も門々之メり始、夫々手当ハ致有之、右ニ付宿屋之分ハ、泊り又者小休等旅人いたし候ニ付、兼而心得居帯刀者勿論、万之旅人たりとも聊疑敷者有之候ハ、、草々惣会所へ内々届出候様申渡、尚又人相書写相渡候而、右人相書之者ハ勿論、其外疑敷者ハ前申渡候通、早々可申出旨申渡候也当二月十九日不容易企および大坂市中所々放火いたし及乱妨候、元大坂町奉行与力大塩平八郎井組頭大塩格之助・同瀬田済之助・同組同心渡辺良左衛門・同庄司儀左衛門・同近藤五郎、快見摺近藤梶五郎等人相書

大塩平八郎

- 一、年齢 四拾五六歳
- 一、眉毛細薄キ方

一、顔細長ク色白キ方

一、眼細クつり候方

一、額開、月代青キ方

一、耳常体

一、鼻常体

言舌さハやかにて (火) 尖キ方其節之着用 一、せい常体・中肉

一、鍬形甲冑着用

一、黒キ陣羽織

一、其余着用不分

(以下、外の人物省略)

※山口之夫「摂津国平野郷町『覚書』と大塩騒動」『大塩研究』№2,1976年2月刊参照。なお、中瀬・村上義光・中瀬紀美子「『鷹見泉石日記』」『大阪産大論集(社会)』 №64,1986年刊も参照のこと。

(3) 2月19日=堺利彦の『講談 大塩騒動』にえがかれた河内尊延寺村の動きと大坂船場の 鴻池本家における事件勃発直後の混乱状態

大塩中斎と大塩事件については、自由民権運動の高揚期にも、黎明期の労働運動・初期社会主義運動の生成期にも、そして大正デモクラシー運動(社会主義・共産主義運動を含む)の飛躍的発展期にも、くり返しふり返られ、数多くの著者・論文にえがかれ、詩歌・講談、芝居などでも物語られてきたが、ここに明治の社会主義者・堺枯川(利彦)によって書かれた、きわめて興味深い『講談 大塩騒動』の一部――、河内尊延寺村における深尾才治郎らの活躍ぶりと船場の鴻池本家における善右細門らの狼狽ぶり――を引用し、当時の雰囲気を想いおこしてみることにしよう――。

「檄文の文言は之でお仕舞なや。サア皆の者、お前達はどうする気か。大塩様のお味方になるか。それとも今迄どほり大阪の役人と金持とにいじめぬかれて、馬鹿にされて、それで泣寝入をするか、どちらなりと銘々の勝手にせよ」

才次郎は斯う云ひはなして、また拝殿に突立たま、、群集の顔を睨みまはしてゐた。群 集も矢張り緊張した沈黙を守って才次郎の顔ばかり見つめてゐる。

「オ、あの空を見い。火事ぢゃ!火事ぢゃ!」と叫ぶ者があった。群集の顔も才次郎の顔 も一斉に西の空に向った。西の空はパァット一面に赤くなってゐた。

「大阪ぢゃ、大阪ぢゃ」「天満の火事ぢゃ! 天満の火事ぢゃ!」といふ声が群集の間に 起った。「鎮まれ。鎮まれ」と才次郎は拝殿の上から叫んだ。其の目は大阪の火事が燃え るように赤くなって光ってゐた。

「あの火は確かに天満ぢゃ、大塩様が俺達に早速駆けつけて来いといふ合図のノロシぢゃ。 サアこれから尊延寺に行って早鐘をつくのぢゃ。皆の者は銘々に用意をして、1人でも余 計に味方を誘って来い。鉄砲があるなら鉄砲を持って来い。刀があるなら刀を持って来 い。ナタでも鎌でも庖刀でもよい。刃物がなければ竹鎗を持って来い。同勢が揃ったら般 若寺村の方に押しかけて、あそこの味方と一緒になって、それから守口、森小路と順々に 進んで行かう。あれ、あれ、火の手は段々強くなる。グスグスしてゐて折角の金と米とを 取り損ふな。サア皆の者、早く! 早く!」

それから程なく尊延寺の早鐘が近隣に鳴り響いた。昼過ぎになると、竹槍を持ち、鎌を持ち、鉄砲を持った何百人かの百姓が、白鉢巻をした深尾才次郎に引率されて、摂州般若寺村の方角へ繰り出した。忠右衛門も弥助も久作も、皆な其の中に交ってゐた。 大坂の空には火の手が益々盛んに起っていた。 百姓達の眼の中にはモウ大阪市中の町々の道ばたに散らばってゐる筈の仰山な金や米がアリアリと目に映つてゐた。」

「同じ日の朝、大阪北船場今橋筋、鴻池善右衛門方の奥の間に、当時学者として有名な**篠崎小竹**先生と、これも有名な書林河内屋の亭主喜兵衛とが対坐してゐた。

北船場は大阪の金穴と云はれた位で、今橋筋には鴻池善右衛門、鴻池庄兵衛、鴻池善五郎等といふ鴻池家の一党、それに次いで、天王寺屋五兵衛、平野屋五兵衛などあり、又高麗橋筋には三井呉服店、岩城、升屋などがあり、富商豪家軒を並べ甍を連ね、其の繁栄を競ふてゐた処である。中にも鴻池の総本家善右衛門の邸と云へば大したもので、昔し淀屋辰五郎が自分で云ったといふ言葉の通り、正に「町人公方の御所」であった。

篠崎小竹は本名を長左衛門と云ひ、博学能文、浪華第一の学者であったが、此人、学者に似合はず蓄財が上手で学者中の鴻池」といふ綽名さへ付けられてゐた。家作なども大分ん持ってゐて、其方の資格では家主長左衛門と呼ばれてゐる。そういふ人物だから、只だ物識りで器用に文章を書き字も上手だと云ふだけのもので、学者らしい見識もなければ誠意もなかった。それで鴻池家に対しては先づ御出入りの格で、今日は主人善右衛門殿に論語の御講釈を申上げる筈で、早朝から此の一室に詰めて、主人の出座を持ってゐるのであった。

喜兵衛は河内屋一党の本家で、これも書林として鴻池の出入りであり、今日も何やらの御買上を願ふ筈で参上してゐたが、丁度篠崎先生が御見へになってゐると云ふので、待ち合せの間、誓く先生の御機嫌を伺ってゐるのであった。 2 人は名香の香りのする殿様火鉢を隔て、浮世話に耽ってゐたが、いつしか大塩平八郎が先達って蔵書一切を売払って施行をした事に及んで来た。(中略)

斯う云ふ話がはずんでゐる所に、当家の主人善右衛門がいよいよ出座に成るといふ知らせがあった。

当家の主人善右衛門の出座と知った2人は居ずまいを正した。

やがて次の広座敷との隔ての襖がスウト両方に開かれた。正面には三枚重ねの紫緞子の 蒲団の上に、丸で殿様か公方様かのような**善右衛門**が、脇息に打もたれて鷹揚に坐ってゐ た。河内屋喜兵衛は忽ち頭を畳の上に擦りつけて平伏した。篠崎小竹先生はまさか、喜兵 衛ほど頭を擦りつけはしなかったが、それでも恭々しく一礼に及んで、殆んど膝行すると いふ形で御前に罷り出で、さすがに威儀を繕って備への見台の前に坐った。

「小竹先生、今日は御苦労に存じまする」といふ御鄭重なお声掛りがあった。小竹先生は 更に又恭々しく一礼に及んだ。町人公方は先程から顎一つ動かしもなされなかった。

其の時忽ち「大変で御座ります。大変で御座りますと、注進の者がバタバタ駆けこんで来た」「何事ぢや、騒々しい」。善右衛門は鷹揚気に問いかけられた。「何事どころでは御座りませぬ。 先程から天満方角に火手が見へまして、何やら筒音らしいものが聞えて居りましたが、早速取調べ聞合せました所、大塩平八郎様の一味が謀叛を起され、程なくこれへ押寄せて参ると申す事で御座ります」

サアもう論語の御解釈どころではない、「それは大変」「それは怪しからん!」と云ふので、**小竹先生も河内屋喜兵衛**も、あはてふためき這々の体で逃げだして了った。**善右衛門殿**も同じくあはてふためくお附の人々に促がされて、さすがは矢張り悠々と奥の間深く引下がられた。

(『愛国新聞』No.5~15、1924年3月1日号~7月21日号に連載)

※なお、この興味深い「講談」については、大塩事件研究会の西尾治郎平副会長のご教示・ご高配によるもので、ここに厚くお礼を申上げたい。ただし、どこまで史実に忠実なのか、全くフィクションなのかについては、今後の研究にまちたい。

- (4) 2月25日=大坂の蘭学者・天文家の間確斎より、江戸の幕府儒者=佐藤一斎への事件報告の書簡
- ----「一大騒動上下之大変古今未曽有之事…人の沙汰何レを是とし何レを非とせん、紛々風

説…落散り候而者不宣候、御覧後火中位の事」---

父の間重富 (長涯) 以来親交の深い、江戸の佐藤一斎あての間確斎 (重新、幕府の天文方御用)の書簡(大阪市立中央図書館所蔵の写本より)を前稿「史料が語る大塩事件の全国(とくに江戸)伝播と *大塩ブーム。=幕政批判思想の波及、民衆文化の創造―その2」(『大阪産大論集(社会)』No.73, 1989年)でも紹介したが、紙面の都合上大幅に割愛し、重要な箇所までカットしてしまったので、ここにあらためてとりあげ、かっての確斎と大塩中斎との深い交友状況やこの当時の複雑な確斎の心境をさぐる手がかりとしたいと思う。

間 されれたこれ変とい お文男 核 おれをのさとのまり 15 ٢ 11 五、ら一大隆動上下し大要君信去方方しるり大豆 西 注 夕中上野的 就 13 Ð 计 以始しと向に怪又の 胶 ζ 没 ħ ሃኣ Ξ, ملاء 30 拷 ずるかな 文艺 3.7 大 何多十百色色便 とうり 尥 Ż, 降新近来了 ŧ 孩 於地り波り 13 等一味書 1 77 大夫と放うましみ大多比市中へ勿的 好场、多多出场影的此名为人 お成 n 午 法 かけるとはして 东 1 ピノの 清中一时 いの就好再順出とかま ならりころ 以活场 かべろとなっえ Æ 与わ すってなお さらは Ţ 移動 1 Ť すれるな 15 んっ 51 17 旭 1º 3 りるかい 地大汽 8a 73. たおきい 、は核 な 面 ちゅら な 手いか となて ā え える þ 去 火 火

「間確斎始而の書翰寄一斎書

前文略、何事も差置急便申上候者、当地大塩平八郎去ル十九日一大変を起し東西与力同心 組屋敷を始、天満郷中・上町・船場火矢を放チ処々放火、当地市中ハ勿論、在々迄一大騒動上下之大変古今未曾有之事共、言語を絶し、上向御堅メ御防キー時之騒動紙筆可申述様 無御座恐入奉存候珍事ニ而、天満組屋敷邊出火と計相聞候処、同日午時頃迄ニ追々其様子 相聞候而、東西南北大騒動ニ相成候、追々船場其外より西向へ男女紛々に大騒雑迯来り候 内、旌旗并幟等を打連テ大筒車ニ而引キ鉄炮ヲ発チ懸火矢を放テ、天満橋・天神橋ハ既ニ 鉄炮鎗にて御堅メ御座候ニ付、同日**八ツ時**頃天満川・難波橋を渡り、船場へ来り当地冨家 鴻池善右衛門并其一類皆大冨家也。人ハ皆立去り可申段申候との事にて火矢を打込、即時 に火中と相成、夫ゟ三ツ井呉服店へ火矢を射込ミ炭屋或ハ米屋平左衛門と申冨家大家へ火 矢を以焼立、其外処々へ火矢を射立打込ミ船場難波橋通ゟ東上、町へ段々火移り候内、追 々上向

ら御防キ方御人数有之、淡路町にて餘程之戦ニ相成候との由、上向之御人数ニ鉄炮 にて被相詰、平八郎同志其外人数敗北いたし鉄炮、鎗、大筒、火薬、旗之物等も捨置退散 **迯ケ去り申候趣、十九日夕方前之事也、夫ゟ火中其外同人并徒党之者御吟味ニ御座候処、** 平八郎其外大將分之者今に行衛相知不申候、近国近在人留メ、船留メ段々厳重之御手当ニ 御座候得共、少々も跡付不申手懸りも無之、火中へ飛込ミ相果候体も一切無之、平八惣勢 三百人計、百姓之内其外武具着用も有之由、五六人雑兵之者鉄炮ニ当り申様ニも申候、大 將分之者も壱人鉄炮ニ当り死申候由、平八父子之外与力之中五六人も同志有之、外藩中之 者も有之候抔と申候得共、色々申候てど連がどうやら相知不申、扨火事ハ其夜翌暁迄段々 焼広く相成、上町へ焼登り本町通りゟ北手にて東御役所ハ裏尻籾蔵迄焼ケ、御城御馬場・ 塩噌御蔵之際迄御代官所も消失、此処にて火留り申候、十九日朝より其夜廿日一日夜一夜 二日二夜之火事ニ御座候、平八郎敗北退去致し候者十九日之夕前ニ御座候、右両夜市中之 騒動、中々筆紙ニ述られ候事ニ非ス、一通り之火事と申ニあらず、乱妨にて火矢を以打掛 ケ焼立候と申物、其上鉄炮抜キ身御防キ御捕方御勢も皆鉄炮鎗抜キ身白双何の事も無之軍 戦ニ付、其内段々火ハ相廻り誠ニ*天*満・船場・上町**町家之騒動言語ニ述難**し、一通り風筋 にて火を恐れ申候類にあらず、戸々家々銘々に隣家合出火ありしことくに存、其上件之景 光何時火矢来り可申候やらも相知不申候心持にて家々驚キ騒ギ火元も遠近之沙汰ニはあら ず、中家以上ハ土蔵ヲ塗リ込ミ近在知音之者方へ立退キ可申、中家以下ハ土蔵も無之、退 キ迷ひ家々の混雑中々可申様之事にあらず、十九日夕悪徒ハ御防ニて退散致し候得共、行 衛相知れず候物故何時不相知候と申物ニて、小拙方角ニも辰巳屋冨家も有之、其外も大分 有之候二付何時事起り可申哉も不相知候次第、家内も立退キ候計二致し候、尤家二難義仕 候ハ小大共銘々近火のごとくニ付、相應ニ波入之者有之候ても一人も不参、既ニ小拙抔御 預り御道具御手当之人足もさへ来り不申候位の事ニ候。十九日廿日二夜二日大心配仕候、 此度焼出され候もの幾多之人ニ可有之候哉、怪我も有之候半、差当り難義上より段々御愛 憐にて難義人御扶持ニ御座候、大坂市中四分一計ハ焼候半か、両御奉行所ハ残り申候、御 城之馬場先之町家にて焼留り申候、御城厳重之御備ハ鉄炮切り火縄皆抜身の鎗の由、尼ケ 崎藩6早速人数馳付陣備有之、岸和田侯も御出馬二而一心寺迄出張御人数御分ケ御城近邊 ニ備の由、孰も四日計被相備、堺奉行衆も数日滞坂御座候由、一昨日より御奉行所も常服 の勤ニ相成候、今日ハ小拙も同旁出勤致し候、先々大変相鎮り人民安堵之思いニ相成難有 御事ニ御座候、扨平八郎奧意難見届人ニ而ありしか、如此大変を起し申候事、何の為とも 不相知候所色々に人沙汰風説も有之、取留候事も無之候得共、当月初旬之事の由、市中近 在極貧難渋之者へ金壱朱ツ々施行致し申候由、何様其節市中にて風聞有之候**自分蔵本を悉 皆書林へ売払**七百両斗有之候との沙汰ニ御座候。**極貧一万人ニ施行**と申事之由、右等之事 お起り候哉とも風聞有之候、何にも碇と致したる事も不相知候得共、**其義を東御奉行る御** 発度ニ而も候欤共、噂ニも相聞申候、夫を立服致し、十九日ニハ御奉行衆与力町御巡見ニ 御座候ニ付、其節鬱憤を発可申所、其徒ゟ俄に内通之者有之急ニ巡見延引ニ相成、既ニ露

顕ニ及候ニ付、夫ゟ自宅ヲ悉く焼拂東西組屋敷其外処々焼立候而船場へ相渡り冨家之面々 焼立此騒動ニ相成候事の由と也、色々人の沙汰何レを是とし何レを非とせん、紛々風説碇 と取留候咄しも無之、鴻池三ツ井其外冨家の向々打倒しのミにあらす、不意の焼失質物焼 失難定候、其外小家末々類 焼 俄 之 難 渋いたわしき者にて其内あわれ成事も相聞へ申候、 扨御城内ハ誠ニ御感心成物にて俄の御備・筈ヲ合せ候如き、早速厳重之御武備ニ而有之し と人挙て美々敷事共感心仕候、御奉行所御心配恐入たる御事共に御座候。早速大平と相成 人氣安堵致候、昨今鎮り申候、町飛脚も昨日迄書状相届今日書状請取可申段申来候ニ付書 状致申候、定而既ニ早く上向ら御注進向ニ而御地に色々沙汰可有之、ケ様之事ハ実ら大造 ニ相聞申候者ニ而御座候、况や一大変事ニ而不慮之珍事ニ候得者、猶又仰山にも相聞有之 可申、拙家焼否も御案思被下候と**今日飛脚初便り**二付一寸申上候、拙家邊ハ延焼不致家内 無恙御安心可被下候、大塩平八郎終ニ急迫を以如期相成下何とも言語ニ及不申候、今日ニ 至り平八郎父子行衛不相知候由ニ御座候、此行末不相知内ハ油断不相成候とて人気今少し 落付不申候如ニ御座候。近国遠国人相書を以、草を分て御探しの由、大塩も終ニ如此事を **仕出し騒動を起し申候、嗚呼何共可申様も無之**、当地大変之事既薄々ハ噂も御聞可有之、 御安心不被下候様ニ今晩書状差出申候、御地噂にて大坂如何と渋川氏にも御案心可被下 欤、明後日手紙可差出候得共、何卒大坂より無事之便り有之由旨、一寸御人使恐入奉存候 得共、三百坂へ御遣し可被下奉願上候、此手紙御遣し等ハ御無用可有之候、落散り候而者 不宣候、御覧後火中位の事ニ可被成下候。以上 下略す

二月廿五日

一齊老先生

確 齊

函大

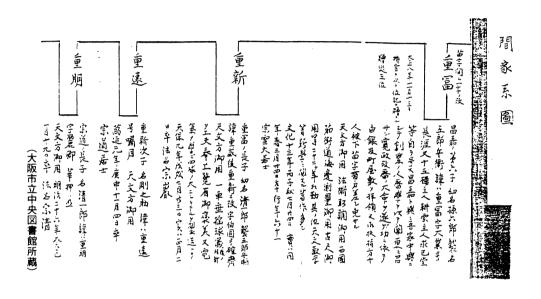
間五郎兵衛 冨田屋町曲り鋪 歴学御用相勤

椿時氏書

大坂油掛町居之町人三芳屋五郎兵衛さこさ染町御座候、其者方二勤居候下女某宿ハ土井大 炊頭殿領分大坂近在之者のよし、二月廿三日夕方二坊主貳人参り亭主五郎兵衛と何か咄、 今奥之隠居所へ参り止宿致候て居」

ここには、大塩の友人で蘭学者・天文家であり、『洗心洞割記』その他を刊行(精義堂版)した親しい間柄の間確斎の複雑な心境――大塩事件勃発と〝大塩狩り、旋風の吹き荒れるなかでの――、そのタテマエとホンネがきわめて周到に語られているのをよみとることができる。ことに注目にあたいするのは、ここで大塩を「逆賊」「公儀を恐れざる暴挙」「不容易企」として非難する言語を一切のべていないことであり、そればかりか、むしろ大塩を心から惜しみ、「大塩も終に如此事を仕出し騒動を起し…鳴呼何共可申様も無之」とむしろ詠嘆の言葉すら発しているのである。そして事件の原因についても、「平八郎奥意難見届人ニ而ありしが如此大変を起し申候事、何の為とも不相知」としつつ、そもそも「自分蔵本を悉皆書林へ売払…極貧一万人ニ施行と申事之由、右等之事を起り候哉とも風聞」がひろがっており、それにもかかわらず、「其義を東御奉行を御発度」とされ、それに立腹した大塩が、

この騒動をひきおこしたのだ(責任はむしろ跡部山城守の側にある)という噂をしるし、「人の沙汰何レを是とし何レを非とせん」として、必ずしも幕府や跡部山城守らの方を擁護していないのが注目されるのである。だからこそ、「落散り候而者不宣」「御覧後火中」へと、その焼失方を必死の思いで、依頼せねばならなかったのである。もしこの点が正しく看破できないとすれば、もはや史家の名に値いしない、といっても決していいすぎではなかろう。これをもって、間確斎を「知識人の弱さ」とか、「日和見主義」だとか安易にとらえてきた従来の傾向はぜひ克服される必要があろう。



Ⅲ、大塩事件情報、長州藩を大きくゆり動かす

(1) 2月29日=毛利家文庫『密局日乗』に、「二月十九日朝五ツ時分大塩平八郎宅合出火」 と筆写され、「平八郎名後素字子起、王陽明之学を唱ふ…頗る豪傑之人なり」と記録

2月19日勃発の大塩事件が山口や萩にいつ伝達されたか? 仲々正確にはつかみがたいが、毛利家文庫(山口県公文書館)所蔵の『密局日乗 自天保八年正月至同年七月 九十四』(正確には『御密用所諸沙汰留書』)によれば、2月20日の「大坂御屋舗6爰元当職所江文書輸之写」として、2月29日の条に次のように記録されているのが明らかとなる――。

「同月廿九日暁

- 一、二月十九日朝五ツ時分大塩平八郎宅台出火と申事御座候
- 一、平八郎家内之者不残切殺し父子同意之者引連致家出火矢を以方々江内掛焼立候由
- 一、平八郎宅北天満与カ町ゟ焼出、南之方へ懸ケ町家不残焼失浪花橋え渡り船場内大焼、 大富家之居屋舗数多、鴻池善右衛門、呉服所三津井抔へも火矢を打掛火急之事故丸焼 蔵へも火入一棟も不残之由
- 一、鴻池他次郎髙池三郎兵衛方も同様焼失之由
- 一、御城向ひ東御奉行所之後へ御代官所屋舗迄焼候由、御奉行所ハ助り候由

- 一、西御奉行所もとふか助りよふに相見候由、近所蔵家抔ハ焼候由
- 一、平八郎其外五人之者百姓躰之者二三百人程付随ひ所々方々へ火を掛ケ乱妨致候由、昨 夜半頃ゟ右発頭人ハ行方不相知、然共火ハ今に盛んにて消へ不申候
- 一、御城代御奉行所付之面々甲冑陣羽織切火縄抜身之鑓ニ而出張相成候由
- 一、大塩勢よりも鉄炮大筒之打懸、双方死人も数多有之由
- 一、双方劔刀大筒等々ニ而打合有之間、火防人一向寄付不相成大ニ燃次第あわれ千万なる 事に御座候、しかし昨夜半頃ゟハ乱妨人行方不相知火妨一通ニ相成候由

右之次第致前後候得共、宣御考合可被下候、乱妨之根元何堂る事とも不相分候得共、先 ハ米事ゟ発りたる事ニ而候哉と取沙汰有之、不定幾重も不慮之騒動けしからぬ事ニ御座候、 今日之様子ニ而ハ最早□利ハ有之間敷追々静り可申御安慮候様ニと奉存候

二月廿日

右大坂御屋敷ゟ爰元当職所江之書翰之写」

しかも、すぐそのあとに「平八郎名後秦字子起、王陽明之学を唱ふ、著に洗心洞剳記、儒門空虚聚語等あり、頗る豪傑之人なり」と、わざわざ特記されているのが注目されるところであり、吉田松陰(1830~59年)らに、のち平戸藩の葉山佐内(陽明学者)らを通じて大きな影響を与えたことはすでに指摘したとおりである(中瀬「大塩事件と自由民権運動(下)」『科学と思想』第48号、83年4月刊参照)。

〈注〉 なお、これよりはやく毛利家文庫の『両公伝史料 天保八年二月』(山口県公文書館所蔵)の2月14日の条には、大坂町奉行が与力の内山彦次郎らを米の買占め工作のため下関はじめ中国・四国筋に派遣することとし、それをキャッチした大坂の長州藩邸では、ただちにこれを国元に報告するとともに、むしろ「米ノ売却ヲ中止」するという対抗措置をとることにした状況が、次のとおり興味深く記録されていることを特記しておきたい――。

「二月十四日、大坂町奉行堀伊賀守利堅与力内山彦次郎ヲシテ同心ヲ従へ米況調査ノ為 中国四国ニ派遣セシメントス、伊藤喜右衛門密ニ之ヲ知リ是日之ヲ香川作兵衛等ニ報シ、 米ノ売却ヲ中止セシム

(江戸御用状扣) 天保八

一筆致啓達候此度町奉行堀伊賀守殿組与力内山彦次郎并同心之者付添穏便御用として西国筋下之関迄近々出足罷越候趣御出入惣代武林理兵衛ゟ極内々申出候右与力地方役并盗賊方相勤当時御館入ニ御座候当節米懸り之御用筋ニ而罷下候様子と相聞申候、尤同人出足日限等之儀い追而御奉行所ゟ御達も可有御座候得共先御内々右承懸ケ之儀御知を申上候段申出候付此段御心得迄急飛船便を以為可得御意如此御座候 恐惶謹言

二月十四日 伊藤喜右衛門

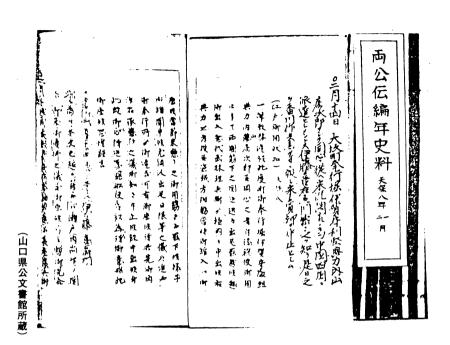
尚々本文之趣ニ付而ハ瀬戸内尚下ノ関御米御売払之儀も御座候ハ、暫御見合相成可然と 存候委細ハ追而長屋藤兵衛罷下候上御承知可被成候以上

> 香川 作兵衛様 木原 源右衛門様 石川 庄助 様」

さらに山口県公文書館所蔵の貴重な古文書『忠正公伝 第五編第五章 一三九』の「第弐節暴民の鎮撫」には、天保2年の長州藩大一揆、天保3年の徳山領一揆、天保4年の長門一揆にひきつづき、天保8年3月を中心に大塩事件に連動して、長州藩各地で爆発した「天保大一揆の動向」とそれへの鎮撫策について、次のようになまなましく記録されている――。

「天保七年に古来未曽有の洪水ありて秋穫凶荒し封内各地の米穀日匱乏して細民の困窮 甚だしく飢餓に迫れるものもまた尠少ならざりしなり、当職役以下の要路は窮民救恤の施 設に尽瘁せしか、其人多くして徹底せす萩城下に来れる貧民は諸宰判の問屋を経て各勘場 に送り他国人はすへて之を追放せり、然るに翌**八年の春**乞丐の萩城に来れるもの漸く多く 餓死せるものさへあり、曾大坂町奉行附属の与力**大塩格之助は父平八郎と共に其徒を嘯聚** して乱を作し其報の伝るに及ひて窮迫の民心を蠢動せしめたり、三月十四日長府領内の農 **民**起りて鐘を撞き竹筒を吹きて**騒擾**し終二**下関の商家を毀てり**、其報萩城に臻りしかは御 目付役小倉藤太実福を馳せ遣はして之を鎮静せしめたり、尋て十六日或は二十二日三田尻 仁井令の農民凡そ百参拾人聚合して喜内(農民)の宅を襲はんとせしか手子其他出てて其首 領を捕縛し之を鎮定せり、或は云ふ、仁井令の農力吉なるもの青麦壱俵を銀八拾匁の高価 になし、其他米穀を買収せること附近に傳はりしかは暴民起りて冨家に赴き、両三日の間 に米麦共に参拾俵乃至四拾俵を徒食し稍騒動せりと、後数日を経て二**十日**また**中関**の農民 拾四五人、翌二十一日新前町の農民拾七八人各相集りて騒動せしか其巨魁を逮捕して皆之 を鎮静せり、其他**大島郡徳地美祢郡小郡**にもまた動揺の民ありしか悉く代官役を出張せし め厳に警戒せしめて巨酋を捕捉せしめしかは大事に至らすして鎮定したり、而して三田尻 、は要衝の地にして其後患あらんことを虞慮し、二十四日御目付役天野九郎右衛門淵、林小 善右衛門習之、物頭役飯田新祐俊昌、国司助十郎貞直、三井善右衛門資敬、山縣麓蔵貞義 に命し御中間頭役及ひ捕手と共に出張せしめ、姑く稽留して鎮綏せしめたり、萩にもまた 動揺の萌芽ありしか、其首領二人を捕縛し他宰判の巨魁と共に牢獄に拘因せり、斯くて二 十八日地方手元役香川作兵衛景長、同御右筆役石川庄助有倫、木原源右衛門道貫之を江戸 手元役児玉三左衛門資昌、同御右筆役内藤左兵衛貞政、赤川喜兵衛忠通に報し、当役梨羽 頼母熙昌に傳へしめたり 是時に方り封内各地二於て火災其他奇怪の浮説を傳へて人心を 動かしむるものありしかは、当局員の外に多くの御中間を派出し昼夜共に巡回せしめて厳 粛ならしめたり**、晦日**当職役益田越中元宣は町村に令し役員外もまた互に注意して流言せ るものあらは、町人は町年寄に、農民は庄屋畔頭に各之を内報せしむ、其告訴したるもの を賞して罪人は直に拿捕せしめたり、是日越中また非人乞丐の萩城下堀内に入るを以て之 を防止せんとし大手の御蔵元所松原口の各門並に深野町番所の番人をして警護をなほ厳戒 にせしめたり、公は養父斎廣の後を承けて其日浅く襲に作兵衛等の報したる封内の窮民騒 動状態を聞きて大に之を憂慮し、飢饑救恤の方法を講究して静謐ならしむへく速に知達せ しむ、依りて頼母は江戸加判役と共に特ニ飛脚を馳せて地方加判役毛利志摩熙徳、毛利熊 太郎熙頼、口羽衛士房通、宍戸伊勢房寛並に当職役益田越中に之を告げたり、斯くて老臣 要路は公の深意に従ひ威厳愛愍の両者を兼行して窮民の救恤と暴徒の鎮壓とに努力したり しか、往々大塩平八郎に同情して盆踊に其仮装をなし、遠石(注、現徳山市)にては演劇 さへ行ひたり」

※なお、この貴重な古文書の閲覧と写真撮影について、特別な御指導・御高配をいただい た山口県公文書館の広田暢久副館長に心からお礼を申上げる次第である。



丛子 用寫本たして飢飲い迎ればきかしはたお皮 班与这并目在并軍職役兵十五五路比定民被 出荒心封内各地の父歌曰:歴乏して知氏の 表行因為人提力大塩林三州比文正八羽又共 りたつに別八王の春も馬の荻城の東ハコも 计嵌城下11 東北,貧民は諸喜別。同屋と註 四の花後に尽虚せしか其人多くして很感世 日典後日母歌上大記左依丁美敬、傳日日及 八各勘場に送り他国人は十八八之之題放世 から病題の民心之奏動としいたり三月十四 日長方領内の震民起り、鐘を造き好而を吹 大佐七年の古史未等有の決水ありて秋後 一街くると飲ルセンよりさいあり今大八町 人餘後し終っ下間の府家を致て、具我花 学式印 基氏の領 五 二三九



(2) 3月1日= *大塩狩り、丹波篠山へと飛び火

嵐 瑞澂氏の興味深い研究「大塩の乱と篠山藩」(『兵庫史学』No.27, 1961年刊)によると、「大塩平八郎の親戚の大塩七郎が篠山藩の家中にいたことは余り知られていない」が、篠山町奉行が記した日記の抜萃である『頭書日記』(青山会所蔵)には、同3月1日に「京都奉行御組同心の吉田幸次郎が調査の為に篠山に来た」こと(なお、目明しの吉田孝次郎については、「京都と大塩事件(上)」『大阪産大論集(社会)』No.65参照のこと)、「その目的は藩家中の大塩七郎は先般平八郎妻、娘、弟、召仕を京都にて召捕へた結果、平八郎と同家であることが判明し、平八郎との文通、懇意の訳合等を糺し度き為であった」こと、そして「領主の差図にて月番宅にて大塩七郎を取調べたこと」などが明らかにされている、という。

また嵐 瑞澂氏によれば、大塩七郎について次のとおり書かれている――。「大塩七郎は翼、後に恵芳と称し、本国尾張、生国攝津、大阪住居御家来分伴右衛門子とあり(藩士由緒書)、安永六年三月徒士格に召出されてから対面所番、広間番等を経て郡奉行になっている。高五十石三人扶持を給されていた。天保三年老年の為御役御免、同十二年隠居、嫡子純之助茂徳(義比)に家督を譲り、同十四年七月廿五日に病死している」

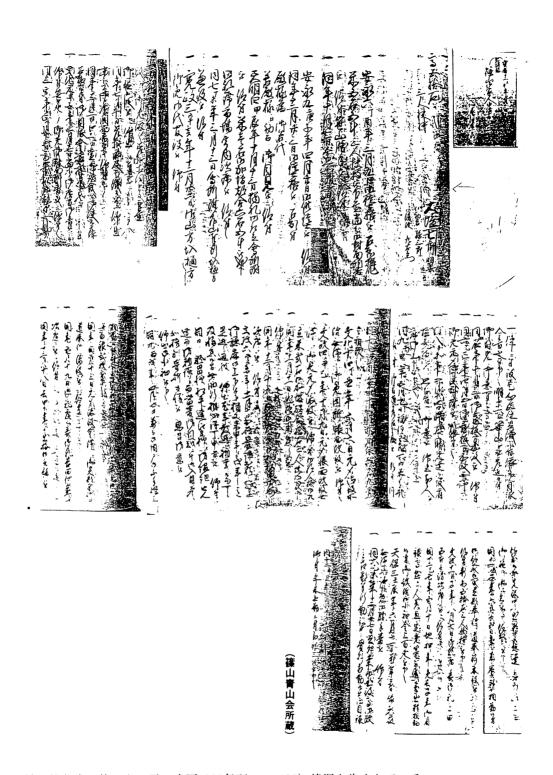
《注》 なお、1982年の史料調査と率論発表の篠山ゼミ合宿の席上、講演して下さった嵐先生は、篠山と大塩の関係をくり返し強調され、篠山にある数多くの埋もれた古文書・史料類を示唆され、高橋先生や酒井哲男氏、北川松太郎氏などとともに、『保酉紀事』全5巻(マルマツ百貨店主 北川松太郎氏所蔵)をはじめ、『篠山御家人由緒書』などの複写あるいは写真撮影に大変なご援助をえた。そのご学恩に心から厚く感謝したい。久保在久氏のご援助も忘れられない。

(3) 3月1日=山陰の浜田藩でも大塩平八郎らの人相書廻達、〝大塩狩り〟旋風

3月1日には、山陰地方石見国の浜田領で跡市組村々へ大塩平八郎らの逮捕のために次のとおり人相書が廻達されている――。

「去る十九日(二月) 夜大坂市中乱妨ニ及候奸賊、元大坂町御奉行組与力大塩平八郎、 同苗格之助、瀬田済之助、同組同心渡辺良右衛門、近藤梶五郎、庄司儀右衛門其外之もの *逃去り候ニ付、人相書左ノ通り、」

なお、こうした *大塩狩り、旋風の吹き荒れるなかで、大塩事件に連動した動きとして、「四月十七日頃 石見那賀郡浜田領原井組・跡市組ニ打毀シノ廻文出不穏トナル」(『編年百



姓一揆集成』第14巻、三一書房1988年刊、p.432)状況も生まれている。

4月17日の跡市代官所よりの指示によると、「此度原井組之内百姓共願之筋これ有り、近々跡市組割元沢津忠右衛門宅相潰し候風聞これ有り」と、不穏な風聞に対し各村へ警告し、同時に「若し徒党ケ間敷く大勢寄合い候ハ、曲事ニ及ぶ可く、万一心得違ニで誘引出

候ものこれ有り候共一切加り申さず、早々訴え出づ可く候事」と異常なまでに神経を尖ら しているのも、そうした動きを裏づけるものである。

(4) 3月6日=長崎『諫早日記』に大塩平八郎らの人相書記載

---3月8日「**大塩平八郎殿**…何之趣意ニ而ケ様ニ被致候事哉与相分リ不申、扨々大 騒動」と記録----

福岡の史家・矢野信保氏の興味深い研究「『救民之謀士難波珍事』について」(『姓氏と家紋』第41号)によると、大塩事件情報が**3月5日**には、**肥前多久の儒者=草場珮川**の手元に届き、同**7日**には、**日向飫肥藩家老の平部嶠南**に達し、さらに**20日**には、薩摩 肝付郡の郷士・**守屋舎人重堯**に到達したことが指摘されており、九州各地における原史料の発掘の進展が今後大いに期待されるまでになっている。

なお**『諫早日記』**(長崎県立長崎図書館所蔵)によれば、3月6日の条に *大塩狩り、のための人相書が次のとおり記録されているのが見出される――。

「一、大坂市中 (及乱妨候奸賊ヵ) 元大坂町奉行組与力大塩平八郎同苗格之助瀬田済之助同組同心渡辺良左衛門近藤梶五郎庄司儀左衛門其外之者人相書左之通

人相書

(中略)

三月六日

追々本文之趣勇太郎殿江も可被相達候以上

諫早豊前様

鍋島安房」

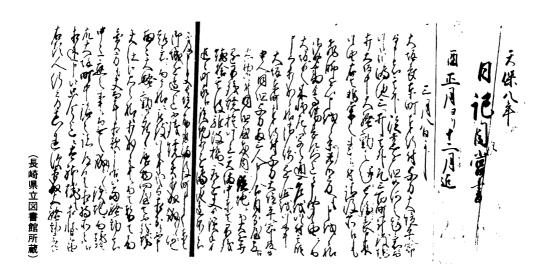
大塩平八郎

また諫早藩の『天保八年日記目曽書 酉正月ヨリ十二月迄』(長崎県立長崎図書館蔵)によると、3月8日の条で、人相書を写しつつ、何ら大塩らを非難することなく、むしろ大塩中斎を殿づけで、「大坂東町奉行付与力大塩平八郎殿ゟ申入、同組与力両三人申合、自分屋敷江火初御付同組屋敷内へ鉄砲ニ而火を打懸……東者御城近辺迄不残焼失相成、誠ニ誠ニ何之趣意ニ而ケ様ニ被致候事哉与相分り不申、扨々大騒動御座候、唐物問屋者不残焼失仕候」として、次のように書きとめられてるのが注目される——。

「三月八日

大坂表東町奉行付与力大塩平八郎与申者其外徒党を組、**如何之趣意二而行候**哉、鴻池三ツ 井其外凡三百斗致焼打、大阪中大騒動之趣**長崎表申来**候由、右者**非常之事二付請役所江も** 飛**脚を以**申越候条共御方へも申越候様**御聞番**ゟ**高場甚左衛門**迄被申聞候由ニ而大坂ゟ来状 左之写之通差越候ニ付、其段申上相成候様御 懸合越候事。

大坂東町奉行付与力**大塩平八郎**殿与申人、同組与力両三人申合、**自分屋敷江火初**御付同 組屋敷内へ**鉄炮ニ而火を**打懸、不残焼捨候上、**天満**中東者不残焼捨、其後**難波橋**へ取懸、 夫ゟ濱手ゟ追々町家江鉄炮打懸嶋ノ池邊抔者不及申 夫ゟ境筋通備後町まで東者御城近邊 迄不残焼失相成、誠二誠ニ何之趣意ニ而ケ様ニ被致候事哉与相分り不申、扨々大騷動御座 候、唐物問屋者不残焼失仕候。右之様ニ相成候事ニ而者、暫者商売方も夫而耳相歎申居 候、当騷動者中々一應之事ニ而無之。誠二誠二鉄炮ニ而焼捨故、大坂町中銘々諸道具相持 所々江相達申候。只今迄ニ大躰焼も相慎候由、右頭人行方志連須相成大騒動御座候。」



〈追記〉

膨大な史料の発掘・調査とその複写のため、全国各地でお世話になった方々、ならびにこの研究の発展のために特研費を与えられた大学当局に厚く感謝したい。また共同研究者として大変お世話になっている村上義光先生(船場古文書研究会代表)の御教示・御指導にも心からのお礼を申しあげたい。

なお、この共同研究において全国的に発掘した膨大な史料は、今後もひきつづき本誌や『大阪産大論集』その他書物として発表していく決意なので、大いに御批判・御教示をお願いする次第である。